



すっぽかされ海水浴を独りエンジョイしてたら種付けされた★試し読み

意馬心猿

〈簡単な説明〉

大学舎で友達になった皆と海水浴に行く予定だったのに自分以外全員行けなくなり意地で一人で海水浴に来たレイカ。浮きボートで、のんびり海水に漂っていたら泳いで衝突した獣人の狼と赤天狗に気に入られ子宝強要される。

【登場人物】

主人公…レイカ♀

桃色の髪、桃色の瞳。童顔、背が小さいが巨乳。二人の事はペロ君とアカさんと呼ぶ。

一人称、私。

お相手1…ペロ♂

獣人狼、短髪銀髪、青目（暗くなると光る）。三角お耳と尻尾を持つ。成長期

前の見た目、可愛い少年狼。来年レイカと同じ大学舎になる予定。番求め中、童貞ナンパを頑張っている。体力おバカ。犬っぽい。親が赤天狗と親友。慕っている。アカさん。レイカの事はレイカちゃんと呼ぶ。

一人称、オレ。

お相手2…赤天狗、通称アカ♂

天狗、短髪赤髪、紅色瞳。赤い翼。男前。つり眉、垂れ目。海で番探しをしたがる。ペロの保護者として付いてきた。普段は酒ばかり飲んでる。お山の故郷は女人禁制なので偶に理由を付けては下界に遊びに来ている生臭天狗。嫁を持つと離れ住まいになるので相手は決まっていけないが屋敷は一応五十年かけて自力で建築した。親友の子供と海に行く前に一緒に散髪屋に行つて短髪にした。仲良し。ペロ君と呼ぶ、たまに呼び捨て。レイカの事はレイカ君やら呼び捨てしたりやら。呼び方は気分。

一人称、僕。

モブ…その他

*

真夏の太陽。さんさん照りゆく、その熱は日焼け止めを塗ろうと焼ける事だろう。女友達と日焼け止めを塗り合いっこしたりビーチボールで遊んだり浮き輪や浮きボートでプカプカしたり楽しむ筈だった。楽しいな海水浴の客層を尻目に一人歩く。

孤独感が否めない。

何故、計画を立てて乗り気だった海水浴に自分以外誰も来ないのか。前もつ

て平謝りと共に断りを入れてきたアスミは後日パフエを食べる約束だから良しとしても他はいけない。何故、当日ドタキャンなのか。一人、道具類や休日を前に帰れと言うのか。

「ぜ、絶対、独りだろうと楽しんでやるんだから！」

海面に浮きボートを乗せ押し泳いで進む。人氣が薄めな所で乗り込むと寝っ転がった。私は私なりの日光浴と洒落込む。

「ふふん、この氷菓子を食べながら優雅に漂うのよ！」

気合を入れて棒状の氷菓子を半分に折ろうと頑張る。意地だ。

パキンツ。

「一本百円は割高だけど、こういう場所だと美味しそうに……」

「アカさん！ 迷子発見！」

「あれ」

「えっ」

ドスンと何か後ろから勢い良くボートに当たり手に持っていた氷菓子が空へ浮かぶ。涙目になった。

ばしっ。

「へっ」

落ちるであろう海面を見ていれば何も起きない。ふと、揺れる海面に影がかかっているのが見えた。私は顔を上げ赤い翼と髪を風に揺らめかす大きな人型を見る。太陽の逆光でシルエツトばかりだが何となく手に半分にした氷菓子を
持っていると分かった。

「ごめんね。ペロ君に悪気は無いんだ。はい、これ」

空中に飛び浮かんでいた彼は、スツと私の浮きボートに入り込むと、ほぼ密着した状態で氷菓子を差し出した。

「あ、ありがとうございます……」

——……え、ち、近いっ……

「……」

「……」

もぐつ。しやりしやり。ちゅうちゅう。

無言で氷菓子を食べる私を見つめる赤い色味が強い男前の赤天狗。頭部に天狗の鼻長の面を紐で着けており身体は酒器の柄物の海水パンツのみ。筋肉隆々

の健康的な肌が少し色つぽく。何故かボートに乗りながら対面で脚を広げ足先を浮かばせながら私を囲い眺めている。平常時の中心部の大きさに目が行ってしまいそうで恥ずかしい。意識してしまう、つり眉、垂れ目な男前。胸の内側で危険な香りを感じた。

「暑い中、食べると美味しいな！ これ！」

私が迷子では無く、ただ氷菓子を優雅に食べようとしていただけという事を教えると三角耳を下げてへこみを見せた銀髪の狼獣人の少年に、もう半分の氷菓子をあげたのだ。瞬時に喜んでニコニコ顔で食べる様子は可愛らしい。

「レイカちゃん小学舎かと思ったら、オレの一つ上か！ びっくり！」

「えへへ。お姉様と呼んでも良いんだぞ」

反応が可愛いので、にこやかに冗談を返す。

「え〜！ それは照れるし！」

「あはは」

立ち泳ぎで海面に浮かびながらニコニコ顔で器用に氷菓子を食べるペロ。無邪気だ。

善意の塊っぽい少年の保護者の赤天狗のアカの事は現在進行形で色っぽ過ぎて不穏なモノを感じるがペロに毒気が一切無いので、あまり警戒していない。

「ペロ、あっち側に、お邪魔するのは止めたのかな？」

「うん！ レイカちゃんと会えたし！」

口を開いたアカを見上げる。吸い込まれそうな紅い瞳と目が合った。

「レイカ君。僕らが今、借りているプライベートルーチがあるんだけど良ければ一緒に、ご飯でも食べないかい？」

「ごはん？」

「朝取れた貝焼いたり魚の刺身とか食べたたりしてんの！ もうすぐ昼だし食べよーぜ！」

「う、うん。私も、ご一緒に良いのなら……」

「もちろん」

「やった〜！」

食べ終わった氷菓子のゴミを浮きボートに付くポケットビニール内に入れ落とさないようにするとペロに引つ張られて海面を進んで行く。

「わあ！ 凄い力あるんだね！」

拍手してペロを褒める。

「そりゃね！」

「ペロ君は、その内、もっと体力がつくよ」

「そうなんです」

頷く。アカが面白そうに口端を上げ身を寄せて囁き言ってくる。

「獣人特有の成長痛が来ると一週間は寝込むことになるんだけれど、それが過ぎると倍ぐらいの筋力になるから見ものだよ」

「寝込む……」

内緒話風ではあつたがペロは泳ぎながらも普通に聞こえていたらしく返事をしてきた。

「あれだよ！ 人族で言うとお親知らずみたいなものだつて父ちゃんが言つてた！」
「痛そう〜」

小波感の返事を返す。正直、よく分からない。

「そろそろ見えてきた。あそこが僕らの一時住まいだ」

「一時住まい……え、借りてるつて今日だけの話ではなくですか？」

「今日で三日目、二週間は滞在予定だよ」

「そんなに？」

「オレの為に用意してくれたんだ！」

「え、ペロ君の為？」

「まあ、ただ滞在するだけじゃなく地元のご飯や地酒を飲んだり、ペロ君の宿題を見たりと、のんびり楽しんでいるよ」

「へえ。良いですね〜」

何となく裕福なんだなあつと思いつながら、お邪魔する事と相成った。

ジユウジユウジユウ。

魚介類が網の上で香ばしい匂いを放ちながら焼かれている。なんて美味しそうなのだろうか。用意された塩、醤油やスタチ液を小皿に用意してパラソル下の机に焼けた品々が置かれていく。

「さあさあ、じゃんじゃん焼くからね。沢山食べて大きくなるんだよ」

慈愛の瞳でペロの良い食べっぷりを眺めながら次から次へと魚介類を焼いて

行くアカ。

「アカさんは……」

「僕は、このまま頂くから大丈夫だよ」

そう言つて大きな貝に透明な酒をかけて蒸し焼きにしたものを立ち食いするアカ。

「あー美味しい」

良い笑顔で酒蒸しを肴に酒を飲んでいる。とてつもなく美味しそうな噛みしめる表情だ。近づいて匂いを嗅いでみると度数が強そうな香りがした。

「呑む？」

「……えつと美味しいですか」

「そりやね。ここら一帯の地酒だから地域のモノの肴とは、その酒が合つて美味しいんだ」

お酒は呑める歳ではあるが今まで飲んだ事が無い。

「……一口良いですか？」

「ふふ。もちろん。種類は幾つかあるから……これとか甘めで女の子は好きかもね」

魔石が使われた冷蔵庫に入っている地酒の一つを取り出しグラスに注いでくれる。一口飲むと甘い風味と共に、スーツとした感覚が喉と鼻を抜けた。

「……お酒って、こんな感じなんだあ」

「あれ初めて？」

「はい」

「どう？ 感想は人それぞれだから正直に言っただけよ」

「……美味しい気がします。ただ、ちよつと、なんだろう？ こう身に染みるよ
うな？」

「お、良い感想を言うね」

「良い……？ そうかな？ ありがとうございます」

褒められて、ちよつと嬉しくなる。

「沢山、肴も酒も、あるからね好きなだけ食べて呑むと良いよ。ほら、もう一杯」

「あ、ありがとうございます」

二杯目を口にして酒蒸した大きな貝に醤油を垂らしていただく。そちら側は辛口のお酒らしい。深みがあるような貝身を咀嚼し味わいながら大人になった気持ちで嬉しくなった。すつぽかされて悲しかったが、こんなに美味しい食べ物やお酒を呑む事が出来たのだ。大人な出会いとか時間を有意義に使っている気がする。帰ったら、ちよつと自慢してやるぞつと、そんな気分になって、もう一杯。もう一杯と呑む。甘いお酒は、とても呑みやすかった。

「しーしーしー……」

後ろから抱えられ両脚を広げられて蓋を上げた便座上に向けられている。そう、ぼんやりと思った。

「レイカちゃん。吐きそうになったら言ってくれよな、オレがするから」

「んんふ、ありがとう」

無邪気な笑顔のペロが三人も入り込むと狭い個室内で私の片脚を触りながら片手を握って、そう言ってくれる。吐きそうになったら？ 吐きそうという気はしない。ただ妙に楽しい気がする。

「おしっこ出そうかな？」

「うん……おしっこ、したい」

そうだった。おしっこがしたくてトイレに行こうとしてアカとペロが場所を案内してくれたのだった。早く出さなくてはと思うけれど出ない。何故だろう。

何時もならトイレに入れば直ぐに出して出るのに。掃除の時以外で長居した記憶は無い。

「出ないね」

「んー……でない……」

「はー……これがマンコかあ。すげーえろい」

「あはは。ペロは初めて見るもんな」

アカは私を背後から支えて脚を開きながら、のんびりと、そう言う。私は自分を支える気になっていた筋肉質な腕を撫でてみた。固くて凄く頑丈そうだ。「はー……レイカ君。そんな可愛い事すると、ぶち込みながら、おしっこさせるよ。良いの？」

「んー……？ おこっちやだあ……」

「あー……立ってきた」

私の大事な部分からズレた水着の場所に何か固いモノが擦り付けられる。ぐ

りぐり、ぐりぐりと揺すられて視線を向ければ割れ目の間に酒器の柄が見えた。

「ふあ？ あ、ん……♡」

「レイカちゃん。可愛い声だね！ あー舐めたい。ねーねーアカさん、おしっこ出ないならさ、オレ舐めて出させるのはどう？ ダメ？」

「そうすると、ペロにかかるけど良いの？」

「レイカちゃんのなら飲んでみたい！」

「あはは。君ら、そういう所あるよね。まあ、いつか。じゃあ座って支えて乗せるから」

「うん、うん！ ありがとうっ！」

ペロがトイレの便座上に、どんつと座ると可愛らしい表情で目をキラキラさせながら私を見上げてくる。

「ほら、レイカ君、ペロ君が、おしっこ出すの手伝ってくれるからね」

耳元で囁かれ顔を、アカさん側に向けると唇に彼の唇が触れた。

「あ、オレも！ オレも、ちゅーしたい！」

「うんうん。僕が手本を見せるからね」

アカはペロの肩に私の両脚を乗せて腕を外す。ペロは反対に私の腰や太股を持ち。私がバランスに、わたわたとすると乳房ごとアカが私を支えて唇に彼の舌が入り込んだ。

ちゅう、ちゆる、ぬち、ぬちゅ、くちゅ。

狭いトイレの個室。出入口の扉は空いているが人が三人も入り込んでいけば密集率が高い。廊下から流れる冷房の空気も、どこか遠く汗が垂れた。

「う……んっ♡ んう♡」

「おしっこ？ この垂れてるの、おしっこ？ 舐めて良い？ 舐めるねレイカちゃんっ」

「ふうっ♡ んっ♡ んっ♡」

何か下半身の大事な部分を温かい弾力が撫でる。にちにちと音をさせて丁寧に丁寧に皮膚や割れ目の内側のヒダを余す所なく舐めて気持ちいい場所に触れた。

「ふう……」

アカが私の口から舌を抜いて頬に口付けしてくる。何故、頬を口付けされているのか分からなかったが下半身が気持ち良くて、そちらに集中力が向くので考えるのを放棄した。

「あう♡ あ、やあ♡ おし、こっ♡ でちや、う♡」

「良いんだよ、レイカ。ちゃんと見ててあげるから出してごらん」

「んあ♡ みる、の♡ なん、で♡」

「あはっ可愛いなあ……レイカの可愛い所が見たいからね、ほらペロの舌に合わせて出してごらん」

「……ふう♡ ふう♡ ふう♡」

乳房の形を、やわやわと変えていた片手が私のお腹上に滑り、ヘソの下を優しく押してくる。温かい手に汗が滲み大きな粒が私の身体から垂れ落ちた。

ちよろ……ちよろ……

「んっ！ ふがっ！」

ペロが鼻息高く喉奥から何かしら声を漏らしながら舌の動きを強くしてくる。私の腰と尻を支える手の密着を近づけて動く舌に自然と腰が揺れた。

「んあ……♡ ふああ♡ な、にあ♡ やあ♡ きもち……♡ あ、あ……♡」

ドロツと滲み出た尿が舌で何度も何度も拾われて、ちよつとずつ甘い痺れが高まっていく。おしっこを出す時に、こんな気持ち良さになるのって不思議で変なのに気持ち良くて頭の中が真っ白くなっていく。

——……なにこれ？　なんで♡　すごく気持ちいいよ♡　ペロ君の舌？　動いてると……どうして、おしっこ♡　気持ちいい♡

じんじんとする私の朱く膨らんだ豆の陰核。すごく気持ち良かったけれど何か物足りない気もする。なんだろうか。変な感じだ。

「はー……この、ちっちゃい穴の中にオレのが入るのかあ。あー我慢できねえ……アカさん、ちよつと舐めながらオナニーして良い？」

「あはは！　良いよ良いよ」

「ありがとっ！」

ペロは水着の下で押し上げて主張するモノを取り出して握りしめる。ぐちぐち、ぐちぐちと液体が摩擦する音がトイレ内に響いた。

「どう？　ペロ君の舌、気持ちいかな。教えてほしいな」

私の耳のを軽く噛みながら、アカが囁いて、ぞくぞくと身が震える。

「うん♡ きもち……い♡ で、でも……♡」

「でも？」

「なんか♡ じんじんして……っ♡」

「ああ。軽くイっただけで本気でイけそうでイけてないんだね？ それは可哀想だ。ペロ。穴の中を舐めながら指の動きを見て」

「ふがつ」

ペロが鼻息を鳴らして返事をし、アカが私の、じんじんしている陰核を指先二本で優しく挟み擦ってくる。

「へあ♡ あっ♡ しょ、しよれ♡」

「うんうん。気持ちいいえ。よいこ、よいこ」

陰核を指平で、よしよしされて、じんじんした感覚が甘く甘く広がって、がくんと腰が浮き上がった。よしよし、よしよし。優しい指先は止まらず陰核から何かが噴出していく。

「あつ♡ あつ♡ ああつ♡」

「はあ……気持ちよさそうな顔……」

アカが、また私の舌に舌を絡ませて声が上手く出せなくなった。その間、ペロが私の大事な奥に舌を入れたまま吸い上げたかと思うと、ふがっとう鳴いて身をブルブルと震わせた。何か熱い液体が私のお尻にかかっている。

「ふはー……すげえ……すげえ興奮する……舌食われるかと思った……っ！
レイカちゃんの中、早く入りてえ……っ」

「わかるよ。僕も入りたいけど軽く汗を流そうか」

「風呂沸いた？」

「時間的にね」

会話する二人に抱えられたまま、私は何処かへ連れていかれたのだった。

試し読み終了、続きは本編で！

すっぽかされ海水浴を独りエンジョイしてたら種付けさ

発行日 2021年8月11日

著者 意馬心猿

<https://www.pixiv.net/member.php?id=8224911>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
